



個の疼きと社会の渦の交点から  
「哀しむ」ことができる豊かな世界をまなざす

心の痛みに  
折り合いをつけていく  
プロセスと  
現代日本社会の精神構造

を認め、喪の作業をおこなうことこそ必要なのです。  
私たちが失ったものを悼み、喪の作業を回復し、哀しむことへ至るなら、日本における「裸の王様」の物語は、別の形となるかもしれませんが。告発する人をハブることなく、寓話のように、民衆は子どもと一緒に笑うことができる物語になるかもしれません。そして、それに気づいた王様も、子どもや民衆と笑い合うことができるかもしれません。

この本を読んでくださって、サイコセラピーという「対話のアート/サイエンス」に関心をもってください、自分もそれを受けてみたいと思っただけです。とてもうれしいです。

組織/社会のなかで言葉を失ってしまった方、大切な人と別離してから自分が空っぽになつたように感じている方や、ご自身が被った傷つきを抱えて生きづらさを感じている方にとって、よいサイコセラピスト・治療者に出会い、作業を始めることは、人生の大きな転回点に

百名近くのグループでは、それに参加するだけでも、大きな不安(グループの他のメンバーに批判されるのではないか、自分がグループで他の人を傷つけるのではないか、という不安)が喚起されます。こういった発言者のなかにある不安が、「日本人」に対して投影され、「脅威」というかたちになったのかもしれない。

このように、国際関係の場では、その人が背景とするわたい、という意識や境界を線引きする感覚によって導き出されるあの人たちに対して、個人はなかで起きている心的プロセスが投影されます。この投影されているものを探求する「対話」がおこなわれたときに、人は「わたしたちとあの人たち」という直線的な関係から抜け出すことができると言われています。

ただし、慎重にならないといけないのは、実際に特定の歴史的なトラウマに言及しながら語っている際には、たとえそこに「置き換え」や「投影」の可能性があるとしても、その人は現在進行形の痛みについて話している可能性があり、

※ 直線的な関係性  
他者/自己は、より個別に他者として対話的に向き合う関係。

それは注意深く問われるべきであり、手当て(ケア)を受けるべきだということ。しかし、その奥に「語り難いもの」がある可能性に注意を払いながら、その語り難さを、私たちは探求するべきだと思います。ここにおいて、語り難いものに取り組み(アート)技法を使うこと、そして知識と理論(サイエンス)を発展させてきた精神分析が貢献できるところが大きいのではないかと、私は感じています。

見えていないけれど、残っている

語り難いものに取り組み(アート)サイエンスとしての精神分析。

自分のせいだと思わないでいただきと深層のダイナミクスの渦があるかでも、落ち込んでしまうわけでもなく、声を発するためのお手伝いをすがつていくかもしれませんし、ご自分なるかもしれません。  
\* や戦後の体験、そしてみずからの分をなしています。このケースに私は

### 世界の戦禍・災害とわたしたちの喪の心

#### 著者から ひと言

この本が、「社会と深層のダイナミクス」のなかで言葉が失われてしまった方々にとって、「あのときに何が起きていたのか？」を考えるきっかけとなり、言葉を取り戻し生き残っていくことを目指される一助になればと……。——また、大切な人を失って、時間が止まったように思われる日々を過ごしている方々、誰にも言えない「傷つき」を抱えて“生きづらさ”を感じておられる方々と、ご一緒できればと願っています。

#### 【著者紹介】

#### 荻本 快 (おぎもと・かい)

国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程修了、博士(教育学)。相模女子大学学芸学部准教授、相模女子大学子育て支援センター相談室コーディネーター。米国ニューヨーク州 Contemporary Freudian Society(IPA) Candidate, 米国ロサンゼルス New Center for Psychoanalysis(APsaA) Member.

著書に『コロナと精神分析的臨床——「会うこと」の喪失と回復』〔北山修と共編著〕木立の文庫〔2021年〕など。

